

ハコニワ - 民間がつくる「公園」のような商業施設 -

敷地は柏崎市横山。
水田と里山を背に、里山と街の境界とも呼べる場所に位置する複合商業施設。
「民間がつくる公園」をコンセプトに、目的空間に満たされた商業施設ではなく、
無目的に居ることが許される公園空間を目指しました。

竣工：一期 2020.10 二期 2022.7
種別：リノベーション（1988年築建物の改築＋用途変更）
用途：複合用途施設（主用途 物品販売店舗）
規模：一期 865.4㎡ 二期 337.27㎡
構造：鉄骨造（インスィルボックス木造）
所在：新潟県柏崎市横山



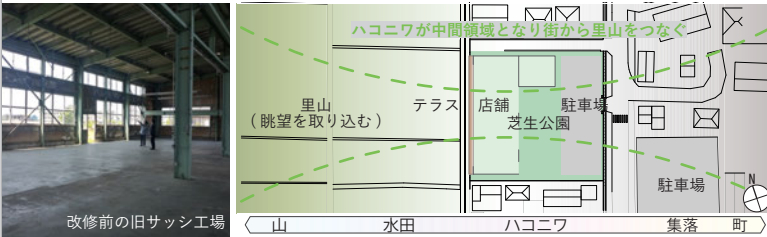
共有スペースを見渡す



共有スペースを見渡す

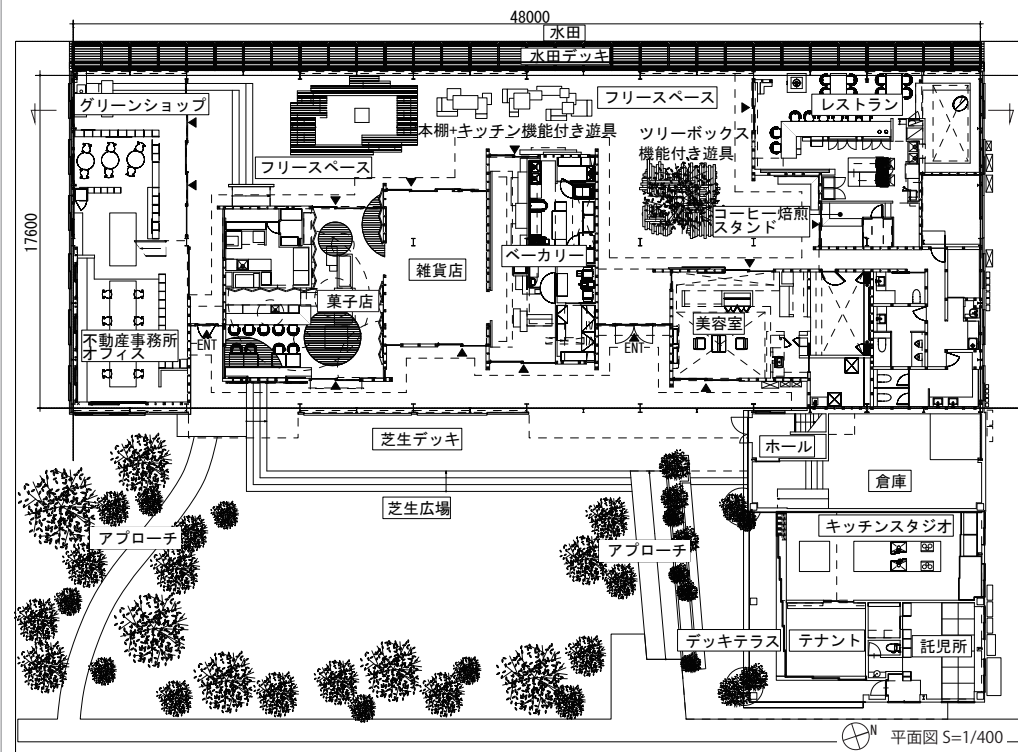
既存建物との時間を越えた対話

敷地は、町のエッジであり里山の麓である柏崎市横山。1988年築の旧サッシ工場のリノベーションプロジェクトである。
床面積 865.4㎡の工場と 337.2㎡の事務所からなる合計 1202.6㎡の鉄骨造（梁間ラーメン構造 桁行ブレース構造）の建物。もともとそこにあった合理的なフレームや老朽化したインテリア、また広大な水田やその向こうに臨む米山。それらに対して新しい視点や関わり方をデザインし、その価値を最大化。町と水田そして里山をつなぎ、屋外と屋内をつなぎ、普段とショッピングをつなぎ、この土地を未来に楽しくつなぐことを目指した。



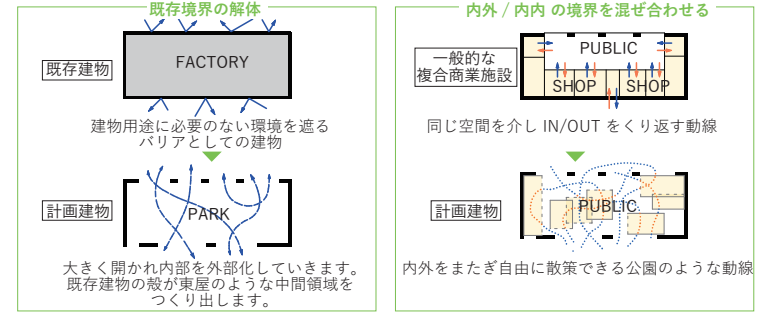
「弱い境界」のデザイン

水田と里山を背に、里山と街の境界とも呼べる位置にあるこの「ハコニワ」。それらを有機的につなぎ、まさにどこからでも入れられ、大きく開けた「境界の弱い」公園のような施設を目指すこととし設計を進めた。
工場という用途のため周辺の豊かな環境に対し閉じていた建物に大きく開口を開け開放することで人を呼び込むと共に眺望、採光、通風などの様々な自然環境を屋内に取り込む。
屋外、半屋外、屋内が混在する大きな工場空間に、テナントを誘致するための7個の木造の箱を屋内と屋外、半屋外と屋内を跨ぐように配置した。それにより、屋外と屋内の境界がより曖昧となり、屋外から屋内そしてまた屋外への移行がシームレスに、町とハコニワそしてそこから水田や里山への移行がよりシームレスに感じられるように計画した。



自由に散策できる公園のような空間

多くの複合商業施設では一度施設に入館し、その施設の中で色々な店舗への出入りを繰り返し、施設を巡るという、目的空間に満たされた商業ベースの体験を主としている。ハコニワでは商業ではなく、あくまで公園であることを主とし、無目的に居ることが許される、目的がなくてもいいんだと感じて頂けることを目指した。



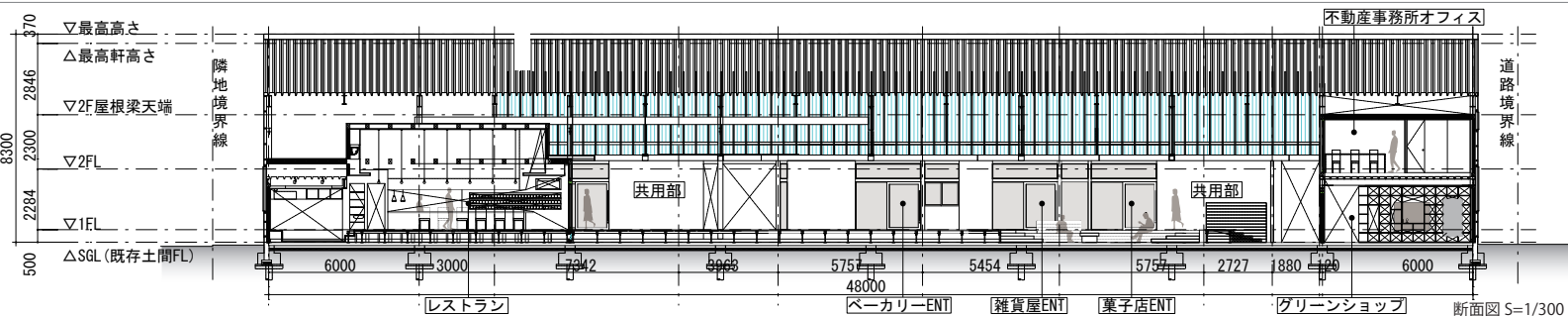
地域の可能性を活かし繋ぐ

7つの木造の箱の構造材や仕上げ材、そしてハコニワ内のほとんどの床材にはこの土地の杉材を採用している。近くの材料を採用することが決して合理的ではない現代だが、多くの方々に協力をして頂くことで地材地建が実現できた。子供達が跳め指をさすあの山で採れた木材でハコニワを作り、その木材に触れてもらうことは、設計者としては何としても実現しなくてはならない譲れない価値であり、これもまた里山と町の境界を弱くし近くにする設計の一つであった。
また、ハコニワ内にある大きな木工家具（ツリーボックスとキッチン）は近くの新潟工科大学の建築を学ぶ学生たちとの協働により実現した。参加した学生たちにとっては知識や経験はもちろん、大きな達成感とハコニワに対する将来まで繋がる愛着を得られたのではないかと思う。多くの人々を巻き込み、山を巻き込み、大学を巻き込み、プロジェクトを進めることに私たちのデザイン対象は一つの旧サッシ工場を越えて、広いエリアの可能性を繋ぐ「弱い境界」のデザインとなっていった。



様々な「居方」を許容する公園空間

街から人を受け入れる広々とした「オープンスペース」、眺望に開かれた「大きな開口とテラス」、それらを有機的につなぐ中間領域としての「店舗群」。体験の連続によって作られる多様な居場所の構築を目指した。
内外境界をまたいで自由に散策でき、様々な居場所のある公園のような空間は、繊細な境界面がつくり出す美しい風景の様な、そして柏崎の風景の一部のように、利用者の日常の一部として永く愛される施設となる。



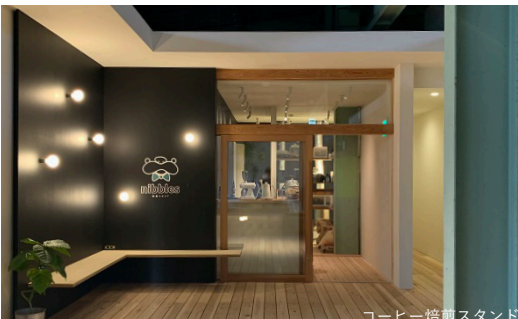
不動産事務所オフィス



菓子店



レストラン



コーヒー焙煎スタンド



美容室



ベーカリー